



色葉集
一



芭蕉翁一坵俳諧

增補

幽蘭集

全部七冊

尾藩

暮雨巷臥典著



幽蘭佳本序



幽蘭佳本序
連夕海一亭
芭蕉翁一坵俳諧
人
友
人



清き水は流るる
 流るる水は清き
 の水は清き水は流るる

木村の士郎

笠と昔達の雨ははらりひ張るは
 とささくれわ〜とあ〜り他
 ほくた〜とひんあは〜わられふ
 夏〜はむ〜ねあれま〜いふよ
 た〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ね白風れあはれ〜と〜と〜と
 た〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 みぬのまゆ〜と〜と〜と〜と〜と
 ひ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 羽解のほろ〜と〜と〜と〜と〜と
 田のらり〜と〜と〜と〜と〜と

芭蕉
 聖水
 荷兮
 重五
 杜園
 正平

象いほハ海に高くはわたりて
髪をゆひつるを一のふきのほと
いつとされつと乳をきりて
きこぬ率於海よすこくと
影はれ境はじく火とたき
わすしは笑またく一虚を
田中へあふ小まん柳あふ
雲よあひ川一人からんこ
黄泉と横上流る月たけ
とあふしつと町よ下りあふ

水 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五

二乃尾よを海のとれのちりきく
蝶ハむらりあそりりあむ
糸物ふすし水邊は中よりあれ
今うとふれ矢をたけし
登人乃記念のふみのあし
志はし京總乃名をけし
笠ねきそを理ふしあふ
あつれまけりあふり
きりくと碎り人の骨何
鳥織ハえひまをぬのり

あ 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五 意 兮 五

わりれとの継りもとけー部と
 秋水一斗りり居るにむや
 日東北孝白坊小月とて
 中ふ木様とて心懸色くら
 牛の糸とてと羊れ夕れと
 笠と鯉の魚をいこき
 象いのり鏡のほりぬまじへ
 夕ふきいりとの眉とてゆふ
 後さく居湯と志加えのむも
 序下ハ藤のけつとてりり

五 必 有 分 必 意 号 五 意 有

ねんじゆ

いふこゝろもを振る

ころつるれとても穉をく帰
 一母よまことなる 藤乃念
 聖と来りて尋ね隙のねをけ
 うつふれと車もよたり
 磨の月神系鞆鼓とてゆえん
 枕花をたをる 貞徳の返

野水 杜因 芭蕉 斎分 重五 正年

雨に降る。沙塵れ田螺ほりて
 負のまありふとふとふと
 床海く流れはらさなれ
 縁巾るふれ恨のこり
 口を〜と痛^{クスハ}とらさるち〜
 明る〜とさたに首おろきむ
 小三たふ壺と〜と〜
 月ハかうれ牡丹ぬ人
 陽網のかけハやうに
 こつ〜と〜地蔵切所

分五必慈五水慈分水必

秘記の世とてや嫁れい
 かありい〜のまう〜
 掃篋と解るる圃ほの
 う〜と起を身智〜
 簾ふ〜桐之持れ葉は
 三縁〜む不破の園人
 今ち〜と〜流て打る基
 祢あり〜のらて七
 奉か〜に沙を〜
 を〜の筆れ下〜

分五必慈五水慈分水必

蓮池も誇れ子持ふ夕暮るれ
 窓よりまつゝ扇帳を下り
 月もまゝ夜半に燈の赤くはく
 意せぬさぬゝ臨濟をまの
 秋。蟬のゝに聲すまのさ
 友のまつゝまはけりちり
 旅をも祝をむき心くけり
 心くけり典侍の扇。内侍の
 云々のまわむ尾長の鳥いよ
 しくいむ 越のこころ

水 字 蕉 水 蕉 五 蕉 五 水 蕉 字 水 水

徒急をむく事

僅り十歩

つみこひく月より扇帳あはれ
 氷もくけり あれいかほる
 歯染れ髪をくら持人の衣よ肩
 少乃御つとをけり 明のま
 る夢うく あまき風のしら
 桑の湯去惜むゆくのたんり

杜 國 重 五 聖 水 名 成 若 兮 正 平

花よりけし物も娘の心よ
燈花よりけし心よりけし心
あふれぬ力らしきを撰れども
春まはしく青く濃賀未の坊
那月夜双たらぬ旅路く
おふ冥ふちらきほききす
馬ふりあわさそ歌を作りあ
翁婦の糸より茶なんとこ
肉つきこは活れあふつたり
佛喰ふる魚解さたり

五 小 水 今 五 水 今 五 葱

縣より花よりけしと仰れり
五形 丁もれの 富六反
あふれぬ心花ちりり
と魚乃馬のわらへる屋也
と、橋や矢刺の橋れり
店屋れる川をよこしてこりぬ
折しき、柴薪もぎのひつむ
あふれをあらく刀賣と
雪の粗 吳乃金れ笠めつし
獲しき、椀り片袖をさく

五 小 水 今 五 水 今 五 葱

あゝ人と指を枕ふのこぼれむ
芥子のむとく下ををこぼれは禅
三日月れ来ハ暗く経れ輝
水濁りけくた 燈之は者
意ふ事をやしてををたむ
くよきとを佛一やよををさる
けりけり新燈濁く起るひく
おのひくつも 夜の帯一川
これ形よけしお花のけり入
うれ屋の目を 象もたれく

五 水 五 水 五 水 五 水

新波はふる芦や焼もあハ

丁〜けきしと

炭賣れ已つるく黒く丸
人乃 務いを 切るん度寒
花蘇馬骨れ霜く候くも
宿々けまとの 月うけながら
風吹ぬ秋の日瓶く酒をき日
蘇藏り市を 市に振す

重五 荷兮 杜國 野水 芭蕉 羽笠

實前川や初鹿子代祭や
いとらの齋りがら
りふ事一布揚がら
うきはくを織る
拾いれてる物
大木らね火炸
門守の翁お
血り
身ありて本
冬ま

今 水 小 兮 五 蕉 笠 水 小 兮 五 蕉 笠

花は泣あぐれ懣とす
傍ものい
白燕
宣旨
八十
か
西
葉
街
鈴瓶

蕉 笠 兮 五 水 小 笠 蕉 兮 五

くちり来て梅子くちる正月も
鼓 手 向 ぬ 弁 茶 の 宮
寅 の 日 の 旦 を 辨 後 の 瘦 弱 く
意 かつ こと 南京 志 地
い き して 誰 とも ぬ 人 乃 像
泥 ころ ころ ね ころ ころ 芹 の 根
粥 下 ころ わ ころ き 形 小 可 ころ
袴 衣 の 下 下 下 下 下 下 下 下
下 の ころ ころ ころ ころ ころ ころ
新 ね ね ね ね ね ね ね ね 雨

小 笠 蕉 水 五 兮 笠 蕉 水 小

田家肥望

霜 月 や 鶺 鴒 の 行 々 々 々 々 々
冬 乃 於 日 見 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
櫻 梅 山 泉 の 体 を 本 来 之 際
心 じ じ じ じ じ じ じ じ じ
音 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
酌 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

荷 兮 芭 蕉 重 玉 杜 酒 羽 笠 聖 水

秋のころ猿の由連歌いとり
 漸く啼きて不二人ある寺
 舞として榎のふれ落る音
 柔く系ゆふをうむる風の香
 籠子よりとほりての女ま三十
 遊り本音作る 恋れ落衣
 夏よこよ山橋ふあうりみむ
 麻りりとらり歌の集あせ
 江をそく宿樂とる世を換く
 歌月とる月ハぬほらある

五 五 蕉 兮 笠 水 五 五 兮 蕉

猿衣笛り為ふをうら折ひ
 翁興ゆふに 木尻の心石
 骨をみるぞよあうり打り
 乞食の養をもよふ志のめ
 泥のうら尾をむく紐を指ゆて
 御幸ふふむむ水の御菜
 毎に照る此小菊夏の心りり
 萱の家留りり産園つく白
 芥子尼乃小坊史と打むれく
 をそくく人のふえ立る道のを

蕉 兮 笠 水 五 五 兮 蕉 水 笠

韓 市 飯 香 の う く 月 の お
 露 打 く ま り 子 月 や 影 子
 釣 材 小 屋 根 下 へ 入 り 鹿
 夏 腐 片 け り ぐ 母 の 喪 小 入
 之 政 の 草 一 の 秋 も 被 ぬ へ 一
 伏 見 本 懐 の 清 水 を ぐ 川
 い ろ ち り 子 こと 孫 こ ん ち り を 挽 いて
 是 の 一 一 乃 の 言 々 々 々 々 々
 水 子 を 秀 白 の 雪 子 や 大
 山 菜 花 小 け 小 笠 の たり 一

五 玉 笠 水 蕙 兮 玉 子 水 笠

海 へ して 鴨 丸 乾 ぼ の へ へ
 申 小 鯨 を 焙 ぐ 鱒
 二 百 年 糸 け 小 糸 弁 と して
 櫻 乃 程 よ く 秋 は 糸 たる け
 入 月 小 懸 の 糸 の 糸 たる 糸
 管 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

七 世 成 相 糸 東 藤 二 山 糸 意

降雨及都る母れ涙を
一輪由ふし 昔菜の窓
基乃工史二方因る目をめく
因し歸ると 孤なりさり
遠き源河原 遙く昔より
身表瓦たる 杉乃入口
笠変て衣の破れ綴り居る
輝れ鳥乃 人喰ひあり
一水々の澄みれ淡八月澄く
霧れしらくみ新をとと蹟

山 菜 蕨 菜 山 蕨 菜 蕨 菜 山 蕨 菜

花曇る 石れ靡を杉もき
夏人のしち地むけりふ
熱の聲 於るき懐と身を健く
し海嵐于ふも 袖とわいれり
木の葉を西ふ 渾葉の望み
蕨小首屋の 十とより人申
何つくと 飽極作る祖父れり
系小名たりし 瘡の 呪咀
石二名根を笠忘てる 雲より
床より 鶴のひらり飛来す

山 蕨 菜 蕨 菜 蕨 菜 蕨 菜 山 蕨 菜

詩くれ小鏡を思ひ 爲るを思
 衣くはく小竹萩の戸を思
 月ほろく可半此言ハつたりと
 糖いそを 滑くくの行由
 彼化せる具之を思ふとありと
 言ふれ縣り 畠つとて
 紅珠の底残ふとふれ香を思
 ちひあき今やの長き日の依
 雲雨乃新發を思 花の思
 青草 ちひあきの後の撮折

蕨 蕨 山 蕨 蕨 蕨 蕨 山 蕨 蕨

貞享二年 三月廿七日

何とはさ小竹や床一まは草
 編り出交く 地すく
 田螺を思 乃くくの思
 云家く 高くは竹れ中色
 月曇る言れ和桐の思
 酒言映乃 いたちの思

芭蕉 叩端 桐葉 蕨 端 蕨

双六の恨をこゝに書けり
登瓜をこゝに種のをり書
髪下は侍従。むすめおろろ
中くまれあゝ〜岐王幸れ証
室持小多あるまをかつけり
藝者をとしり。名月の園
面白れ拉女乃種のおとろ
燈風を〜のこ。紅あゝ
川激流磐を角に踏む
舍利を。澁小物白梅〜

蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙

男を石れ沖すれ花久〜
羽織り酒をかつるあゝや
かゝとて女〜螢おろろ
枕屏風の陰ふあゝ〜
冨りあけ〜帯れ多えのをらり
三袋のあこ。深川〜乃和
奄。信や。独杜律を味れて
くれ幽あゝ。中〜道の書
いふに鳴。鶉ハ吹多と負ふ
も汲。小傍。神。也。く。に

端 蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙 棠 端 蕙

月夜くお枝山をるるはくん
 雲ハ夜望れ 此地ゆあり
 村雨の澄き控る馬の岩
 之く河 怨れ 丘 吟み音
 笠今申れ人としくく雨らけ
 男やめれ 老う 怨りく
 風くさく大寺の夜の七つき
 御門をゆく 生 經の奏
 岩盤山 岩盤く助。くれ 吟み
 雲くく 雲 連 雲 御の松
 雲 端 雲 雲 端 雲 雲 端 雲

夕くと夜の花の神くち
 雲くく 雲と 橋 雲のくく
 日氣山 雲をれ 雲をくく
 清水をくく 雲 雲 雲
 雲くく 雲く 雲く 雲のく
 雲乃く 雲く 雲く 雲
 相 雲 芭 雲 叩 雲 黄 雲 東 雲 二 山

これ我小部の連歌 書けり
ききりたり 三升れ浄す
高きより 漁の姨。そして
痛しけり 鴨乃に 五百の元
杉風の衣 酒を飲けり
佛と刻し 西宮の僧
為解世に 誓切女 夏より
意を足被る 羽の 月
秋に 狂はく 味は物 喰ひ
白子に 更 糸 芳の 海

山 柴 蕙 瑞 蘇 口 系 山 瑞 蕙

波よ 流る 舞の 骨 小 くれ 急ぎ
庭 干す 於 却 の つ 遠より
笠 打て 鹿 小 急ぎ 瘦き
小 室 の 燈 の ぼ かり けり
鶺鴒 の 尾 を 端 の 國 ふり
用 巾 着 を なく 今よの 打死
筆 今よの 朴 の 廣 葉 を けり 焼地
田 今よの 戸 にも の 見 せ たり
打 今よの 前 蜜 の 言 を けり
た 今よの 君 を 酒 実 たり

蕙 瑞 蕙 柴 山 蘇 口 蕙

池乃袖一 鮎 遊をそう
 河ほん 帰一 京の 町をらふ
 薩祖乃 東の 寺に 月啼く
 猿も此 震れ 行を 抑くう
 坪一 鳴くま 浪村に 秋の 光
 茅屋 漁一 馬の 尾乃 斧
 秋れ 霧の 雲物 焼く 迄の 神一
 入日乃 紅の 早も 山一 三
 雲ち 油 中 けりも 光の たぐ
 流一 一 此 象 馬一 一 此 西 水

柴 山 蕙 山 蕙 柴 蕙 楫

貞享三寅年

日乃 雲を 吹れた 鶯の おり 乳
 夕きり 小た 夕きり 暮の 相の 雲
 雪村 柳一 夕きり 揮一 夕きり
 酒の 幌一 入あひ の月
 秋の 山 夕きり 夕きり 暮ん
 炭 竈一 夕きり 夕きり 夕きり
 里一 の 夕きり 夕きり 夕きり
 糸 の 夕きり 夕きり 夕きり

其角 文鏡 枳風 口彦 芳重 杉風 仙化 李卜

船るよよ之橋をたむけちらまれん 挙白
 名佛よおよ 借り川くよち 朱陰
 街ゆくく遊歌の真と居る人 坡立
 歌をせまも じく川の群 千り
 明ぬの夜子打忍辱 馬より空 芭蕉
 うき世の病を 高れんをくらぬ 管
 惜すれ 高れ本權のまふ小 鏡
 後任女 きあつこくちく 角
 山あつて乳をのむ様の群 交
 翁を甲斐の 花ともん 枳

法のと家刺髪を埋しん 杉
 くらつてこれ記をとる草の戸 空
 嘆息を車かするこれのかけ 卜
 橋々小雨をゆるりけらふ 化
 海雪あるあふ山子れあつて 弦
 之川に砕く壺をともる 白
 殿守。眠こころる 朝月を り
 ちりちり眉をかきけよぬく 蕉
 聖子嘆く情よん由る高あれお 枳
 系まけれ風り 矢篋切入 桑

かゝれとて下され蟹よ。狐 毘
裏 月 ね 乃 くらりくらり
石の戸 桶 鞆 ち 坊 小 音 下 して
糸 二 代 乃 刀 山 一 洲 治
永 緑 ハ 金 走 一 一 松 の 風
追 江 乃 田 一 忽 更 流 又 知 人
と 一 起 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
船 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
築 堂 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

角 龍 白 卜 化 定 角 卜 枳

待 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
友 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
雨 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
理 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
あ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

化 葱 白 角 龍 白 枳

人あさしとく物をつきしり
 酒もりいしじ 金山、ほろ
 け玉の武徳を名ある 陸よかき
 京小汲する。醒弁れ あり
 玉川やゆめくくらのにそく
 江湖くふとくさるにたり
 卯のふれの皆精ふしやる。れ
 中、うこそは 花かこくさる
 南むくもをれ畑の霜消く
 親と畏をうし 盆の片れ

枳 蕉 化 蕉 角 弦 水 不ト 鏡

餅作るあれ唐やあさとり金
 贅尔買あく 秋のうらら
 麻の言を物いそめ人いすつら
 小くよなをされ 衛すし月
 管れ雨たりとて星をぬるは
 佇弱 河内乃冬れ川了
 水車糸はく音ハあくまて
 梅とあしりれ 院くをん
 おあききれ蓬山人いすちや
 姉ふ川牛一の想いこの日の影

枳 蕉 下 水 角 子 重 缺

約あをぬ 翠の端をゆくゆく
おのいあ〜した 春れ川岸
まゝのまゝを〜〜〜をてに〜
木急まこゆ。 山陰ふ〜
因^下をやくて休む。 朝月ね
暮ら〜ゆい ちっけれあひ
同し所^前と免ふ名ををそ
ち〜らなう〜んせハ蝶の〜
三房ふじよ〜の橋〜の山
あ〜〜ハまっふれ 春れあ

下 化 陰 志 卜 歟 下 鑄 枳 莖

傾城を忘れぬまのよきよ
経〜〜〜筆と〜にち〜りて
竹あ〜〜筆と〜にち〜りて
梅〜〜〜ふ〜〜ふ〜しなり是
む〜らあにるれ打 吹波ぬ
蛇〜〜ぬ乃 沖〜〜も教〜
修務を糸月ふ旭の身^舞さ
榊^{ヤキ}えら〜もそ 春 遠〜 秋
佐長れ治れ代わすゆん
居士と 鳴〜〜〜まの兒

鑄 水 下 卜 化 水 疾 白 手 鑄

卯一松舟 十里此 香を分て
 是すじ 谷了と。湯をよく
 岩根すし 此地地蔵をよめし松
 々々や 三并れ 若法師た
 通ぬ 意々々々々 山と山
 策路を 舟中 舟ハ 法々々
 之は 此 高々 泊る 舟の 意々
 子 舟 々々 々々 親意の 舟名
 舟 舟 川 涼々 舟 川 了ん
 尾 長 舟 舟 松 乃 一 塔

美 硬 角 毎 化 重 氷 角 枳 使

康 延 乃 七 府 六 松 舟 花 舟 舟
 連 航 々 々 々 々 々 々 々 々 々

卜 白

花 咲 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 懼 々 々 々 々 々 々 々 々 々 細 橋
 之 踏 木 々 々 々 々 氷 々 々 々
 米 一 升 一 々 々 々 丸 圓 の 戸
 舟 舟 々 々 々 々 舟 舟 舟 枕
 松 舟 々 々 々 々 舟 舟 舟 舟

芭 蕉 清 風 举 白 舟 良 二 高 共 角

すく衣ふとむじれく落く
内外乃下向一つ也
既立討多此使いり
一夜乃ちきり街のきり
松明の顔思おとし君いた
生く後子れ水り流
孰くもしぬくを学欲
とれ候を中りよ山寺
雪を指櫻やあらしる落
虹のはしれ八日も白ひ

角 白 高 良 風 菊 燕 良 白 風

志河にそハ温泉を碓氷月
之川川麻乃むらみを夏
指くと軍ふ言ある物
をささるれ打しをね
條玲し明乃風雅を是れ
たささるれ牡丹ちり
年とさ妹告し部
片れあき美流と孝屋
札焼て刀さるハ片
象う川一書を殿の出

角 白 高 良 風 菊 燕 良 白 風

横のくちら狂おや所くよき屋く
 糸の月夜ハさうとととと人
 物と好くものやむ人乃智得
 眉ぬく袖乃 翠巻ようつしき
 くのうととととととととととと
 しのりー買し 言れ山今ち
 新れさハ 貧屋子控ー破れ袖
 何や新くてー 匠焼ぬ浦
 相圓乃 徳たるんくは花と狂
 車をとりて てるのやすくは

高 雪 白 慈 良 角 風 慈 角 白

納涼れおくー 以控さる 和漢
 月のあかりてすー せ

被 風 口 小 日 新 や と と と 夕 涼
 煮^レ茶 蠅 避^レ烟^ヲ
 合^一觀 醒^ム馬 上^ニ
 っ 此 ち 小 田 此 ち 落 以 ち ち

素 崇
 素 崇

月^一代^口 見^ニ金^一氣^ヲ
 露^一繁^ニ漆^ヲ 玉 涎^ヲ

堂 慈

法旭、ものゝまゝに砕の中
幢を片たし、そそれむく

契^テ篇^ヲ 驅^レ 偷^ニ 嵐^ヲ

ももふくみやここのころお雲を
くろくくぬ着りまゝをる 松の撥
乳をのひ揉り、何を愛ふ

舟^ノ 鐘^ノ 風^ノ 早^ノ 浦

鐘^ノ 絶^レ 日^ノ 高^ノ 川

教^レ りり子苗の泥まゝをいは
食^レ る下^レ けぬぢやうとせは

蕉 堂 、 、 蕉 堂 、 蕉 堂 、 蕉

誦^ニ 教^ニ 三^ニ 社^ヲ 本^{ナラ}

韻^ニ 絶^ニ 五^ニ 車^ヲ 填^シ

花^ノ 月^ノ 夫^ノ 山^ノ 雨^シ

篠を杖^ニ 流^レ く老のくくみす

剪^テ 銀^ヲ 鮎^一 寸

箕^ノ 面^ノ 乃^ハ 流^レ やむを蘇^レ ん

朝^ニ 日^ノ 新^ニ 歌^ニ 此^ニ 証^ヲ をかや

風^ノ 玲^ノ 唯^一 早^ノ 乾

うん^ニ 了^レ 泰^ノ 景^ヲ あく杖^ヲ ち

内^ニ 大^ニ ともん^ニ 遊^ノ の夕^ノ 月

蕉 堂 、 、 蕉 堂 蕉 、 、 堂

霧レ離レ顔ヲ執レ與レ

堂

霧レ浦ニ目ヲ潛レ焉ト

堂

あつと心ヲ忘レてそノむヲ似レるもの多ク

堂

まニしレぬレ旅ノ珠ヲおとりて

堂

山ニ伏シ山ノ平地ニ

堂

門ノ一番ノ門ノ小天ニ

堂

鶴ニ鶴ニ窺ニ水ニ鉢ヲ

堂

霜ノふくのりをしては明カきやひ

堂

あつふくふく初ノ秋ノ夜ノ露ヲふきて

堂

臨レ谷ニ伴ニ蛙ト仙ト

堂

貞享四丁卯

猿ノ伯子をてててくくのり

とれをとらみひらをし

時ヲ秋ノ時ヲをこらし旅ノ時ト

露沾

尸ヲもも孫ノ風ノの目

芭蕉

山ノ尾ノ刈ハ田ノ秋ノのあひひ

沾蓬

式者述レけり一ノ平川の水

其角

著りるる元ノノつらき横われ

露荷

あらわらぬ意一ノ枝ノ吹く松

沾荷

傘の陰をかぐしらのひびく
 露沾
 霧むくし 井山の氏
 露沾
 暑もれ汗をうけむ様の露
 沾荷
 控し尸乃よきえりたる
 沾蓮
 乃そん五天のひし法もく
 其角
 髪ある僧に 袴つせきく
 露沾
 意を改 徳倉山乃 菊ふし
 露沾
 一ひる たりと白ふ 風葉
 とせ城
 月清く夕立流ふ守れ 蝶
 沾蓮
 衣を洗ふく 狸 調し
 と角

花咲く人 集る 菊 露沾
 露板 むらふ 山 少きの 梅 沾荷
 徒流流や たられ 後のまき 流 露沾
 響く川 したに 香 陽しる 露沾
 摘の葉お 糸又 葉を 書と 露沾
 舟し ゆるん つ方の あり 露沾
 物し けが しのひ あきた 月 露沾
 琴をと 吹すれ 秋れ あり 露沾
 るを下りて 整 結り 秋の 露沾
 九 掃 指 尾上 露沾

風の和とあふふ獲珠のいりく
 大いあふふ 庭乃 音拂
 久りあふふ 鳩の那立子本まひく
 独 簾を 編くく片乃
 一軸乃 形見れ 連欵 様よ垂
 名を 恥ぬるさ 越のたぐい
 面うけて 鏡しむふととつ夫
 今何しをのほるう 獅ふれ考
 穢^シ 穢とこれの海れを片打く
 柳の水乃 てもくれく

沾蓮

とせ成

露沾

沾荷

高荷

露沾

沾蓮

沾荷

とせ成

雪

江戸あふふ心よりんいりれ
 薩 徳れ 母とくくく
 貝もあふふくく水機なして
 醉しとく人乃 肩とくり片く
 今ふの雪のりあふふと証父と舞
 根すゆ 苗杉 輝の雪を
 池の橋わく 始ね 垣ゆい
 今れと入帆の雪やひく

獨子

芭蕉

嵐雪

共角

蕙

子

菊

雪

世の中を盡すのうらむ葉の烟
 妹ののられりるやあしこ
 形えこふ袋乃切のちつこ
 ゆめをとほきく園乃 松風
 津のぬれきまなくとあうりく
 之ねとまられ 民うあゆみ
 一考の連歌をとむけ寺ふ
 苗代もゆゑ 雨こまらなり
 海のれ葉のいとわらふと
 秋風りりかゝる 暮れ夕月
 子 蕙 雪 子 雪 蕙 子 雪 蕙 子

あま葉や人をくぬ 市の物 陽子
 とまりと 葉よ 入 葉の言 其角
 舟の負たつる負け 津一々 久松
 舟とたぐ舟の星とささ 仙化
 海うらむ松のりあさ 松風
 甲よとらんすふ一せ 工部

幽卷一
 三十一

た刀おる亭のゆれて家一これ
 車のみをたつてむすむし
 身身友川地前カヤ枯く
 うけいと帆子いらと捨りん
 振うところには居く強り
 津秋合ぬるとらきる夜
 加着川の海を船のやにほむ
 蘇らりしれ 市原のあり
 贈代つた杖了夕まくれ
 牛を彩るは月のみよふね

化 子 角 化 風 角 秋 蘇 文 子
 子 録 蘇 秋 角 化 風 角 子 化

花のいと志クハハのせとけはくれ
 枕うさむし 一玉の碑
 朝うらむ賢者を海を舟とそく
 洞のうらむ 終る 燦と乞
 去しうやむ舟の舟よ酒との
 らハ崎と 青とせのたひ
 比の時きハわれのさしと
 水ぬひしき 跡まきし 巻
 片玉の老屋のむを角入く
 伊勢のりい五くち 愛笠

李下 風 蘇 角 下 秋 蘇 子 蘇

夏涼きや 吟子の初よも
 るい子被る切花 けしけ
 月入る 電光る 膚 下
 こゝろの芳と 花よやき米
 塚の下母きこむ杖の尻
 邦を軍にこゝにけりも
 られのおくちうら言に待らま
 下組とゆふ日白 雲

下 化 母 角 節 子 下 化

貞享四丁卯年

早湯れ園をみまや 吟らるり
 舟 湖つた 琴れふ所之火
 築山のやうにれは橋を植へけ
 あうよ小猫のきこく建けく
 響のきき 音をいり月のほのこ
 をうれちるいの中くもきし風

芭蕉
 安信
 自笑
 知足
 業言
 如風

一里乃 忘母なる川上た
 初 何れ 忘るく 門下を 心
 市 心ゆく 忘るく 心を 抑え
 うし ぬれ 音 夢さる 物いひ
 月を 行 螺貝の 酒
 言 ぬ小甲を 可 けく 雄の 風
 たり 所 あり 古 法の 心
 倉 作 西 行 若 花 あ 忘れ
 本 終 了 した 杉 乃 枝
 辰 言 風 矣 意 風 伝 之 言 重 辰

嘆 忘れ 登 坂 町 を 忘 れ けり
 山 け ぬ 心 忘れ けり 氷
 辛 螺 油 忘れ けり 氷
 角 あり 眉 化粧 霜
 待 育 の 命 を 食 けり 性 の 内
 祈 忘れ ぬ 爰 小 枕 あり 心
 深 なる 心 忘れ ぬ 心
 鹿 子 心 忘れ ぬ 心
 式 日 の 日 忘れ ぬ 心
 海 忘れ ぬ 心
 辰 言 風 矣 意 風 伝 之 言 重 辰

標干に願う〜ぬる夕すこ
笠もてあふ川〜菅大のふけ
初月小外里の娘乃新通ひ
す〜きはよ〜く 荆 袖川
朝霧さつ〜さけ 鷗の嘴さ〜ん
赤く祿〜ち〜く ざめ〜く 介〜て
氏人乃 彦星を多き〜花中〜り
か〜る 飛〜い〜く むれ〜の 志〜さ〜く 以
田を〜す あ〜り 乃 山 乃 名 をと 留て
〜の 外 小 跡 をと 留〜て 此

意 矣 之 意 辰 矣 言 風 伝 守

旅人と 志 名 とも ち ち 志 名 志 意
何〜く〜と 志 志 志 志 志 志
宵明の 秘 の 本 儀 を 新 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志 志
小 志 志 志 志 志 志 志 志
雅 の 志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志 志

如 行 志 志 志 志 志 志 志 志

物とあてゝ多麻のらなる。 相思ひ
 又又とくく車一を〜に
 樽籠よくとと樽の山草
 玉子あがり〜業人の人ら
 櫛作れぬも供〜ふまの風
 三日月ほろ〜くさむ白き〜らり
 物を入る神川とさくむの信
 負く流し〜の走〜り白き
 沖良位よ能き白髪と撰むされ
 枕〜老の盤ぬ 百年一の竹
 系 系 竹 系 系 行 系 系 行 系

唱海古徳氏葵をうに飛井亜相の
 沖張草のわらと徳〜と和す

京まてはる〜る〜や 雪れま
 ら〜り〜り〜〜ひ〜この月
 小舎〜り〜たる〜ぬ 神はちそ
 酒音 ちひれは〜の風
 ち〜く〜 藍色の袋を打〜ぬ
 僕ハお〜れ〜牛い〜く〜なら
 芭蕉 業言 知足 如風 安位 自笑

二つ三つ及南れ鴉さきつ〜
 鳴りれいのちれ飯多うり立
 流る舟極も明るに山々〜
 清い〜と〜あるお〜む〜
 主は〜と列〜乃存も一〜
 なる〜を〜く〜鄙〜の接折
 髪は〜つ〜態の油さ名も〜
 才小瘡と〜く〜解は〜
 弱筆は外〜た〜を〜月のお
 や〜〜のち〜
 足 伝 風 意 玄 足 意 筈 伝 辰

小袖〜と〜見〜も〜
 こ〜〜猫の〜を〜
 父の〜を〜
 松〜に〜
 翅を〜
 後〜
 之序〜
 山も〜
 煙〜
 足 意 筈 伝 言 筈 意 足 伝 辰

机を〜〜〜のぬ所を獲〜〜
 こほ〜〜〜贅れ〜〜〜 強力
 明〜〜 鐘ゆ〜〜
 巾ゆ〜〜 必れ 境〜〜
 古細〜〜
 物〜〜
 松明〜〜
 多〜〜
 就中〜〜
 温泉ハ 煮て人〜〜

蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

け塚の女ハこれの名〜〜
 た。あ〜〜
 朝霧〜〜
 ゆ〜〜
 水ふる〜〜
 わ〜〜
 毛川〜〜
 鞆衣〜〜
 解法〜〜
 一層〜〜

蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

打ゆふも雲ふも似るぢひをして
 縣の齊し志しし自さ然目
 秋山乃依枝を去るし急し小
 今ら一節を荊し多る蓋
 優遊塞り沖し廟はあゝ文をみく
 為人起り世を明りたり
 雲葉よめれ葉の雨の音
 多し桶の音も鳩牛とらさき
 西行のまをふるふ花咲き
 雲乃らららに 融るららり
 雲 霧 雲 霧 雲 霧 雲 霧

貞享五年

信のあれ花とハハハハ白ひれ
 し急しし 物白をくくせ 雲
 まふくはあれ松も音をましく
 ニヤふのし今れ 沖幸待たり
 多し明のま細をきぬよ川つと
 ねあめハさるこ 世の油火
 雲 霧 雲 霧 雲 霧 雲 霧
 又云 平唐 勝延 清里

鈴柄に袖まゝに流るるまで
門 ほう先さる 田の中一の寺
山路まゝに 一から稀ある袖の行
まゝに 一から稀ある袖の行
女のまゝに 一から稀ある袖の行
基より 一から稀ある袖の行
いねそよ 一から稀ある袖の行
陣一の仮屋に 一から稀ある袖の行
白雲ふの 一から稀ある袖の行
そよめそ 一から稀ある袖の行

先 翁 倉 玄 延 人 光 里 倉

を 一から稀ある袖の行
一から稀ある袖の行
神 仮ふや 一から稀ある袖の行
五のふに 一から稀ある袖の行
悉くちと 一から稀ある袖の行
くいふを 一から稀ある袖の行
たぐと 一から稀ある袖の行
まゝに 一から稀ある袖の行
あこころ 一から稀ある袖の行
海のまゝに 一から稀ある袖の行

玄 翁 光 人 延 倉 里 翁 光

花うきくきみ六のさる縁の蝶
 一〜〜月〜銀香吹ち〜
 後うけておとれ月と見えあり
 こゝろとすまむまの園もさ
 歎えたり茶によみ水と歌つる
 よし神風をよめに代。なす
 け坊をゆ〜よはやち〜
 ゆ〜こむ揖ふ船つ〜
 りの〜ふれら〜と花を〜
 経丹乃〜人神〜垣のま
 人 延 玄 正 永 翁 克 彦 人 延 玄

笑松越人もあ〜と物のみ
 舟り積夫を入るる川〜
 五六町布細干糸あ〜
 楞む北に〜草の中〜
 明もさも房〜わ月乃酒〜
 静〜く〜さ〜
 荷兮
 越人 如行 聖水 越人 荷兮
 延 玄 正 永 翁 克 彦 人 延 玄

帷子に拾那殿も 秋先よきて
 食ふも稿 之もさし田舎なりき
 非とも常ハ入るこゝろ序き
 境々すく 藪の——と刈
 とやくと還却乃死々崔泊て
 強や——とゆ 念佛
 —のひ入るを明くして故ふりれ
 浮名——れつる月の——と
 世とわく 流る眉のきこく
 人小たりれききとをわく——と

水蕉行水人兮行雪蕉

是乃賀よきと持心を継ぎて
 ころころ梅を 穂る 幕串
 下ころろ海を子向れ御詣り
 わかほきき 喰ふ人乃ととと
 とらくと一扉入——と目れき
 せりれ雨に 鑑とけりて
 ころけくハハれ固聚れ為也
 其懸き——人のい——の父
 布——ち母破れれ昔れ秋の風
 了り——の月松 誇の月

人仍蕉水仍人兮行雪兮

松のこころつらさふ舞の年ふくま
 念力岩をこころふ——とて
 今られへ乃去と一唱去りて
 去去の輿り——皆を投て
 りの指を若く下給うはるや
 峯こころそく。八百の巻
 表透り物籠こころ幽静
 りをゆりし親乃月ありけり
 其れの秋すねるも打れを
 猫なると移る 秀吟たて

如風 安位 重辰 蕉 素 瑞 辰 桐 風

有郭の解つ着る女をれとびて
 袖のゆるる筋を 志情きく
 流るる短冊かてはるる
 飛あり流きを背負ふき流
 て字を執り無——とてあひく
 五日乃風の字 雨乃宮
 葉子賣も本くれけの位とる
 去屋れ外面 けり名物

位 辰 蕉 素 瑞 辰 桐 風

幽
卷一

五十三終

